

編集後記

『日中語彙研究』第6号をお届けします。ご投稿くださった方、執筆を快くお引き受けいただいた諸先生方のお蔭で、第6号も充実した内容をもって完成の日を迎えることができました。衷心より御礼申し上げます。

研究論文では、陳力衛氏の「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」は、20世紀初頭、医学用語として日本から中国に伝わった「気管支炎」がほどなくして「支」による連体修飾構造の“支気管炎”に変わっていく過程を辿り、その原因を分析しています。ここで編集子の個人的エピソードを一つ披露するのをお許してください。筆者の出身地の中国東北部では年配者に日本語由来の中国語を使う者が多くいますが、三年前に亡くなった父親もかつて「気管支炎」をそのまま中国語で“气管支炎”と言っていました。“气管支炎”と勘違いをされ、若い世代の人からは、なんと文学的な言い回しだろうと言われたものです。侯仁鋒・袁薇氏の「日本語からの新借用語についての整理と考察—1978年～2014年—」は改革開放後、日本語から中国語に入った新借用語について、先行研究を踏まえながら整理しなおしています。改革開放前からすでに存在していたもの、中国語固有のものもあるという可能性を指摘しました。劉澤軍氏の「中日辞書における凡例の統一性についての一考察—『漢日大詞典』を例に一」は《漢日大詞典》(上海译文出版社、2016年)の凡例を対象に、統一性に関わる問題点について論じその起因を分析しています。「特別寄稿」の「中国語とはどんな言語か」は、昨年10月29日に愛知大学語学教育研究室主催の公開講演会で講演してくださった上野恵司先生に、講演内容を寄稿していただきたいという急なお願いにもかかわらず快くお引き受けいただいたものです。長年の中国語教育そして中国語検定の仕事に携わってこられた先生ならではの中国語学についての思考を分かりやすく語ってくださいています。「研究ノート」では吳琳氏の「日本語の慣用語に関する研究の概観」が、慣用語の研究を時系列に即して萌芽期、模索期、成立期、成長期、発展期と区分して概観し、さらに現在の多角的な観点からの研究も見渡しています。「新語録」では創刊以来最新情報を届けてくださっている趙蔚青氏による2016年の中国の新語・流行語のレポートも興味深いです。「動向」では、今号初めて執筆してくださった施暉氏の「中国における中日語彙対照研究の動向2016」を掲載しました。

最後になりますが、創刊号から変わらぬご尽力をくださっている顧明耀先生とともに、たいへんお世話になった中日大辞典編纂所事務室の平野有夏様に感謝申し上げます。(編集委員会)

『日中語彙研究』第6号

2017年3月31日発行

編集・発行 愛知大学中日大辞典編纂所

名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777

Tel. 052-564-6122 Fax. 052-564-6222

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/>

組版 株式会社あるむ
